

江戸期からの奈良晒で暮らしに「遊」を提案
株式会社中川政七商店 奈良県奈良市

江戸時代にさかのぼる伝統

江戸時代に隆盛を極めた奈良の名産品「奈良晒」。創業文政元年(1818年)の株式会社中川政七商店は、その伝統を今に引き継ぐ。

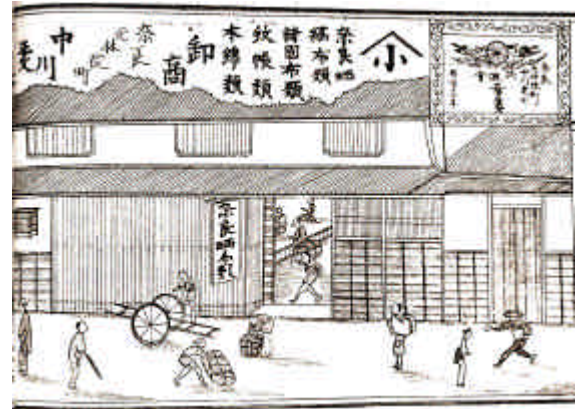
現在は、茶道具の一つである茶巾ちやきん(茶碗を拭き清める麻布)作りの縁で開始した茶道具全般の取り扱い。さらに、麻生地を活かした雑貨やインテリアの開発で、伝統を現代の暮らしに活かす生活提案により、奈良、東京、大阪の百貨店を中心に古都奈良の彩りを広く販売展開している。

その精神は、茶道においてお客様にくつろいでいただく「もてなしの心」とロゴマークでもある「遊び心」にある。

江戸時代、近世南都(奈良)の産業都市としての発展を支えたものが「奈良晒」である。

奈良晒は佐保川や吉城川で麻織物を晒して加工した織物で、その品質は「麻の最上は南都なり……世に奈良晒とて重宝するなり」(日本山海名物図会)と絶賛され、最盛期、豪商が大晦日に大金を集金する様は井原西鶴の「世間胸算用」にもみられる。

中川政七商店は、創業は文政元年(1818年)にまで遡り、奈良の伝統産業の日常を描いた明治17年刊の「大和名勝豪商案内記」にも、中川政七商店の当時の様子が描かれている。



明治時代以降、奈良の産地でも蚊帳地かやなどに転換が進み、その後、第二次世界大戦を境に全国の多くの麻織物産地では存続が難しい状況になったが、奈良晒が今も残るのは、中川政七商店が月ヶ瀬村などに織布工場を設立し、織子の養成と麻布の普及に熱心だったことによるといわれる。

伝統の精神を取り入れた商品開発と多角化

人々の生活様式の変化と共に奈良晒を扱う問屋も現在では2、3軒となったが、そのなか同社では、奈良を彩るインテリア商品、生活雑貨としての新しい用途開発と事業多角化が進んでいる。

会社概要



会社名：株式会社 中川政七商店
所在地：奈良市池田町 203-4
電話：0742-61-6677
FAX：0742-61-6697
創立：昭和58年(創業：文政元年)
代表者：代表取締役社長 中川 巖雄
資本金：1,000万円
従業員：100名(パート含む)
事業：麻製品製造・卸売・販売。茶道具卸売
URL：<http://www.yu-nakagawa.ce.jp/>



ならまち(奈良市元林院町)の奈良本店



「遊」の心が、のれんやタペストリー、ふきん、高級バッグなどで提案される。



奈良晒が衰退するなか、まず、同社が取り組んだのが茶道具への多角化である。

以前より、茶碗を拭き清める麻生地である茶巾を取り扱っていたことから、茶道具界にはなじみもあり、茶碗などの陶芸作家、漆器作家を抱え、自社企画のお茶道具の販売に乗り出した。

12代目となる現社長、中川巖雄氏がお茶道具を扱い始め出会ったのが「遊」、すなわち、お客様に来ていただきくつろいでいただく「遊び心」「もてなしの精神」で、今も同社のロゴとして取り入れられている。

そして、「遊」の精神が現在の商品開発に生き続け、季節に合わせた色とりどりの麻を小物や雑貨、インテリア類に取り入れた、遊び心にあふれる商品群につながっている。

ミセス誌に取り上げられ全国的な人気に

麻地による様々な商品提案を打ち出す直接的な契機となったのは、昭和63年に開催された「奈良シルクロード博」へのブース出展である。

奈良の特産品として、正倉院御物の文様などを取り入れた斬新な麻のコースターやのれんを制作し、それらは、日常の暮らしの中での麻製品という珍しさから上々の人気を博した。

このことから、奈良晒の「手織の風合いの良さを理解してもらえないのではないか」、「汚れも落ちやすく、扱いも楽な特性は日常生活の中で生

きるのではないか」という着想に結びついた。

事実、「家庭画報」「サライ」などのオピニオンリーダー的な雑誌で通信販売アイテムとして取り上げられるに至り、また、その後も、ミセス向けの雑誌において特集記事などで紹介されたことで、同社の提案する麻生地製品は、全国に人気を広まることとなった。

現在、同社は、奈良県総合卸商業団地に本拠を移し、お茶道具を扱う第一事業部、麻生地製品を扱う第二事業部に組織変更され、ならまちの奈良本店を始めとして、東京、大阪の高級百貨店でのインショップ・テナント展開が進んでいる。

素早い事業展開に対応する情報化

日常生活に「遊び心」を表現し、こだわりの素材を「用」の美しさとして提案する同社の姿勢は、「クォリティの高い伝統製品を守っていくなかで、表現で工夫をしている。」「じっとしては、情報が入ってこない、すなわち、刺激を受けず退化していく。」と語る社長の言葉に表れる。

そして、事業の多様化、全国展開が進むなか、現在、IT（情報技術）化が進められ、全社的な情報共有と迅速な情報伝達が図られている。

伝統の中に常に近代が取り入れられ、伝統的な心が発信されているが、その担い手となっているのが多くの若い人々であるのが印象的である。

（山城、井阪）